琉球大学学術リポジトリ

Uterine artery embolization for postpartum and postabortion hemorrhage : A retrospective analysis of complications, subsequent fertility, and pregnancy outcomes

メタデータ	言語:
	出版者: University of the Ryukyus
	公開日: 2021-04-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Toguchi, Masafumi, 渡口, 真史
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48280

（別紙様式第３号）

論　文　要　旨

論　文　題　目

Uterine artery embolization for postpartum and postabortion hemorrhage: A retrospective analysis of complications, subsequent fertility, and pregnancy outcomes

（産後出血、流産後出血に対する子宮動脈塞栓術：術後合併症、妊孕能に与える影響についての後方視的研究）

氏　名　濱口真史　印

論文要旨

背景；子宮動脈塞栓術（uterine artery embolization: UAE）は産後や流産後の出血を制御する治療法として有用性が確立されているが、術後の子宮感染、卵巣機能低下は子宮や卵巣の血流低下より Asherman 症候群や卵巣機能不全等、妊孕能に悪影響を与える。

UAE の内容は、両側の子宮動脈に誘導したカテーテルより選択的に塞栓物質を注入する手技であり、その際に子宮動脈の血流低下が得られるまで塞栓物質を注入するのが一般的である。他臓器で塞栓物質を用いた手技では、塞栓深度が強いと虚血に関連する合併症が増加することが経験的に知られている。以上より、UAE の第一の目的である止血と血行動態の安定化を担保した上で、子宮動脈の塞栓深度と合併症の発生に関連が見いだせれば、患者背景や臨床所見に応じて塞栓深度を調節することで合併症発生を抑えることができると考える。UAE 後の妊孕能についての研究は不

20 × 20

十分であり、特に不妊治療患者について言及した研究は存在せず、さらには血管造影所見について検証した研究は存在しない。

目的；産後および中絶後の出血に対する子宮動脈塞栓術について、血管造影所見と術後合併症、また不妊治療中の患者における妊孕能への影響について評価した。

方法；2008年から2017年の間に分娩後または流産後の出血に対し、緊急または予防的にUAEが施行された59人62症例が対象である。臨床所見やスコアリングした子宮動脈の塞栓深度、術後合併症の有無等に関して調査した。また、挙児希望症例においてはその後の妊娠、出産についても追跡調査した。

結果；平均年齢は34.1±6.5歳、臨床的成功は59例（95.2％）で得られた。大量出血の症例では、子宮感染の発生が有意に多かった（p＝0.014）が、子宮動脈の塞栓深度に有意差はなかった。挙児希望のある23人のうち14人（60.9％）が妊娠し、10人が生児を獲得した（43.5％）。生児を

20×20

獲得した不妊治療中の4人中3人が出産時に癒着胎盤や重度の腹腔内癒着があった。

考察；臨床的成功率は許容範囲内である。また、子宮感染の割合は過去の文献と比較すると多く発生していたが、その診断は臨床診断に基づくので、塞栓後症候群との区別が難しい。塞栓深度と合併症の発生にも有意差はなく、現段階で塞栓深度を調節することは不要であると考えられた。その一方で再出血した症例は子宮動脈スコアが低く、子宮内分枝まで十分に塞栓することが必要であると考えられた。妊孕能に関しては過去の報告と同様であった。不妊治療患者では流産率や出産時の合併症が多かった。

結論；出血の重症度に応じて塞栓深度を調整する必要性はない。妊娠率と生児獲得率は許容範囲内であったが、不妊治療を受けている患者では流産や出産時の合併症が多かった。

＊要旨は3枚（1200字以内）にまとめること。

20×20